

聖書：創世記 47：1～31

説教題：私がたどってきた年月

日時：2024年7月14日（朝拝）

ヤコブとヤコブの家族はヨセフに招かれて皆でエジプトへやって来ました。悪い獣に食い殺されたとばかり思っていた息子ヨセフとヤコブは22年ぶりに再会しました。その彼は何と今や全エジプトを支配する者になっていました。ヨセフに会ってヤコブは「もう今、私は死んでも良い」と言いました。

今日の47章はヤコブと彼の家族がエジプト王ファラオに拝謁する場面から始まります。ヨセフはファラオに家族が到着した旨を報告した後、まず兄弟5人をファラオのもとへ連れて行きます。彼らは自分たちは羊を飼う者であること、飢饉が激しくてこの地に寄留するために来たことを述べ、ゴシェンの地に住まわせてくださいと願い出ます。前章の最後でヨセフと打ち合わせた通りです。その彼らの希望通り、牧畜に適したゴシェンの地が与えられることとなりました。ファラオは有能な者たちがいたら王の家畜の係長となるようにということまで言ってくれました。ファラオが親切に接してくれたことが記されています。

その後で父ヤコブがファラオの前に出ます。ファラオに問われてヤコブの語った言葉が9節にあります。「ヤコブはファラオに答えた。『私がたどってきた年月は百三十年です。私の生きてきた年月はわずかで、いろいろなわざわいがあり、私の先祖がたどった日々、生きた年月には及びません。』」皆さんはこの言葉を読んでどのようにお感じになられたでしょうか。ちなみに第3版まではこう訳されていました。「私のたどった年月は百三十年です。私の齢の年月はわずかで、ふしあわせで、私の先祖のたどった齢の年月には及びません。」何とヤコブは自分の人生を振り返って「ふしあわせで」と言っています。あなたの人生はどうでしたかと言われて、「ふしあわせでした」と信仰者が言うとはどういうことかと思ったものです。新改訳2017ではここが「いろいろなわざわいがあり」という表現に変更されています。こちらの方が原語の訳として忠実ということなのでしょう。しかしニュアンスはほぼ同じと言えます。このヤコブの言葉を同じ信仰者として、どう捉えたら良いのでしょうか。

確かにヤコブの生涯を振り返るなら、そこにあったのは困難と苦難の連続でした。

彼は長子の権利が欲しいあまりに父と兄をだまし、母の実家へ逃亡することを余儀なくされました。そして彼はそこで母の兄ラバンにだまされました。下の娘ラケルと結婚したくて7年間一生懸命働きましたが、約束の日に与えられたのは姉のレアでした。ラケルを得るために彼はもう7年間働かされました。さらに彼はそこでもう6年間、合計20年間働かされました。そしてカナンに戻り、奇跡的に兄と和解できましたが、心隙ができた時に娘ディナがその地の人々に凌辱されました。それに怒った息子たちがその地の住民をだまして男たちを皆殺しにしました。また愛する妻ラケルが二人目の出産と引き換えに死んでしまいます。さらにラケルとの間に与えられた最初の子ヨセフがいなくなります。そして飢饉が襲い、生活が苦しくなります。それで穀物を買うためエジプトに息子たちを遣わしましたが、そこでも苦しく悲しい経験が続いたのを私たちは読んで来ました。まさに不幸のカatalogと言えようような人生です。今まさかの導きでヨセフに会い、エジプトに来ましたが、あなたの一生はどうでしたかとファラオに問われて、「いろいろなわざわいがあり」とか「ふしあわせで」と語ったのもごく自然であったと言えようかもしれません。

しかしそれでも私たちはもう少し何か言えなかったものかとも思います。なぜヤコブの生涯にはわざわいが多かったのでしょうか。それは彼の罪と関係するのではないのでしょうか。彼に臨んだ多くの苦しみは彼自身の罪がもたらしたものと言えようのではないのでしょうか。そしてそのように見る時に分かって来ることは、彼の人生は彼にふさわしい報いよりもずっと良いものだったのではないかということです。自分が犯した罪の数々を思うなら、もっと悪い人生になってもおかしくなかった。とうの昔に彼は滅びていてもおかしくなかった。しかし一人さみしく放浪の旅へと出た彼は今や70人もの家族を持つに至っています。また今ヨセフと会って、こうして奇跡的な祝福の内に生かされています。そのようなことを考えると、自分は様々な罪を犯してわざわいを自らにもたらしたが、主は過分な恵みを私に施してくださいました。色々な苦勞はあったが、主はそれを上回る驚くべき恵みで私を支え導いてくださいましたと主を賛美しても良かったのではないのでしょうか。

私たちも自分の人生はどうだったかと問われて、どう答えるでしょう。もしかしてそこには色々残念に思うことがあるかもしれません。自分の思いとは違った人生だとため息をつくかもしれません。あのこともできず、このこともできず、私の人生はふしあわせで、いろいろなわざわいがあったと言いたくなるかもしれません。しかし本

来私が刈り取るべき状態からするなら、ずっと良い状態を恵まれて来たと言えるのではないのでしょうか。私たちの罪にもかかわらず主は驚くべき恵みをもって導いてくださった。直ちに滅ぼされて当然の者なのに色々な幸いや楽しいことを恵まれた。そのことを多く数え上げることができるのではないのでしょうか。

しかしヤコブは恵みを全く忘れてただ愚痴っていたわけではありませんでした。今一つと思われるヤコブの点を先に見ましたが、一方ではしっかり信仰に立っている彼の姿も記されています。まず注目すべきは7節に「ヤコブはファラオを祝福した」とある点です。相手はエジプトの王です。豊かな王です。自分の人生はわざわいだらけだと告白する人が、時のエジプト王を祝福するなんてあまりにも滑稽ではないかとも思われる場面です。これはヤコブにはアブラハム、イサクと受け継がれて来た神の祝福の約束の担い手であるとの自覚があったということです。「地のすべての部族はあなたによって祝福される」と神はアブラハムに言われました。人間的な目で見比べればヤコブよりもファラオの方が上でしょう。ですからファラオがヤコブを祝福することはあっても、その逆は通常あり得ません。しかしヤコブの神はファラオよりはるかに偉大であり、恵み豊かなお方です。その神からの祝福をヤコブは祈ったのです。10節でファラオの前を立ち去る時もそうしました。ここに神の約束への信仰に立ち、また神の召命に生きているヤコブの姿があります。

ではヤコブがそのような偉大な神を持っていることと、その彼がこれまでの人生でふしあわせであることとはどのように調和するのでしょうか。彼の信仰が見えるのは9節の「たどってきた年月」という言葉です。この「たどってきた」と訳されている言葉は「寄留する」という意味の言葉です。4節で息子たちが使った「寄留する」という言葉と語源が同じです。つまりヤコブは自分の人生全体を寄留者生活として捉えていました。この世における人生は自分の国ではないところでの一時的な滞在の生活であると。自分は神が用意くださっている天の故郷に向かって巡礼の旅をしている者であると。とすると、この地上の人生で不便なことやうまく行かないこと、心地良くないこと、その他、色々なハプニングと思われることがあったとしても問題ありません。一時的な滞在先でそのような経験をすることは旅につきものとさえ言えます。私が一つ思い出すのは長老教会の海外宣教委員としてフィリピンへの宣教ツアーに同行した時のことです。多くの期間はマニラ市内にあるウィクリフのゲストハウスに宿泊させていただきましたが、遠い場所へ出かけた時、そこにあるホテルに泊まること

になりました。そこは海の島の上に立つホテルで素晴らしい場所だと聞いていました。私たちはワクワクしながら向かいました。確かに私たちが泳ぐ前でイルカの群れが横切っていくような最高のロケーションでした。ところがいざホテルに到着してみてもびっくり。聞いていたのとは違い、廃墟のようなホテルで窓枠はボロボロ、ガラスもあちこちがなく、ベッドの上に立つとバキバキと板が壊れ、体にかける布団や布もないところでした。みんな寂しいなあ～と言いながら寝ました。しかし一時的ですから、その時は大変でも、後になってみれば笑い話です。私たちが天国に行った時、地上での様々な苦しい経験をむしろ懐かしく思い出すのではないのでしょうか。逆に旅先で素晴らしい経験をすることもあります。同じフィリピンツアーの帰り、空港まで行ったら、何と予約の再確認を怠ったためオーバーブッキングとなっており、席がないことが判明。予約していたエジプト航空の次の便は3日後とのことで大ピンチに。皆でお祈りしていると、航空会社の人に来て「よろしければファーストクラスに乗っていただいてもよろしいでしょうか、追加料金なしで」とのこと。私たちはもちろん喜んで受け入れて最上の席に座らせていただきました。豪華なシート、豪華な食事、豪華なもてなし。これも旅行中の一時的な出来事だと思えば慎みつつ楽しむことができます。必要以上にそれらに振り回されることなく、目的地に向かっての旅を続けて行けば良い。ヤコブはそのような目を持っていたのです。ここでの苦難は多いかもしれませんが。しかし神は約束に従って必ず最後には真の祝福へ導き入れてくださる。その神を信じている者として彼はファラオを祝福し、そこを去る時もファラオを祝福したのです。ここに信仰の人ヤコブの姿を見るのです。

続く 13～26 節は、神の民に良くしてくれたファラオへの報い、あるいは今見たファラオに対するヤコブの祝福の結果と見ることができます。ここでファラオは祝福されます。ヨセフは穀物と引き換えに銀を受け取りましたが、人々の銀がなくなると家畜を差し出すようにと言います。そして家畜もなくなると土地を買い取ります。一見、血も涙もない厳しい扱いのように見えるかもしれませんが。しかし注目すべきは彼は自分のためにこうしたのではないということです。これらはすべてファラオのためでした。14 節に「ヨセフは、その銀をファラオの家に納めた」とありますし、20 節にも「ヨセフは、エジプトのすべての土地をファラオのために買い取った」とあります。20 節に最後にも「こうしてその土地は、ファラオのものとなった」とあります。また、土地を差し出すこと、およびファラオの奴隷となることは民の方から申し出たことでした。19 節で彼らの方からそれを申し出ています。そして 25 節には彼らがヨセフに

感謝している言葉が記されています。種を与えて、収穫の 1/5 はファラオに納めるようにという規定は厳しく思われるかもしれませんが、当時の税金は 1/3 から 50% くらいが普通だったようです。それからするとずっと低い値です。これらはすべてファラオのものとなりました。こうしてファラオは豊かにされたのです。

最後の 27 節以降もヤコブの信仰が現れているところです。イスラエルはゴシェンの地で大いに数を増やしました。46 章 3 節の神の約束、「わたしはそこで（エジプトで）、あなたを大いなる国民とする」と言われた通りです。ヤコブはそこで 17 年生きました。これまでわざわざが多かった彼の人生でしたが、この期間のことは特に何も述べられていません。これは問題のない幸せな最後を過ごしたということでしょうか。そう言えばヨセフは 17 歳の時にヤコブの前から失われましたので、ヤコブが最初にヨセフとともに過ごしたのは 17 年間となります。それと同じ期間、ヤコブは人生の最後にヨセフとともに過ごしたことになります。特にこの一致に意味があるとは聖書は述べていませんが、あのかつての幸いな期間をもう一度過ごしたということになるでしょうか。

そして注目すべきはヤコブはこの幸いにただ埋もれて終わったのではないということです。29 節以降で死ぬ日が近づいた時、イスラエルすなわちヤコブは、私をエジプトの地には葬らずに、先祖の墓に葬ってくれとヨセフに言います。そのためにおまえの手を私のももの下に入れてくれと言います。これは 24 章にも出て来ました。詳しくは分からないこともあるのですが厳粛な誓いであることは確かです。ヤコブが言う先祖の墓とは、アブラハムが妻サラのために買ったマクペラの洞穴にある墓地のことです。そこにアブラハムもイサクも葬られています。これは神の約束に従って私たちは必ずこの地を受け継ぐという信仰を表明するものでした。そこに自分も葬るようにとヤコブは言います。このヤコブの時代になっても神の約束は全然実現していませんでした。しかもみんな今エジプトに移動して来ています。しかしヤコブはあの先祖の墓に必ず葬ってくれるようにとヨセフに誓わせました。ここにエジプトの豊かさ、今の生活の豊かさに目がくらまされることなく、神が与えてくださるものこそを何よりも尊び、それを第一に求めて歩んだヤコブの信仰が示されています。

私たちは今日の御言葉に照らしてどうでしょうか。自分がたどってきた人生を振り返ってどう表現するでしょうか。それはふしあわせなものだったでしょうか。わざわざ

いが多くあったでしょうか。確かに願った通りではなかった人生、予想とは違った人生だったかもしれません。他の成功した人と比べると惨めでつまらないものだったように思うかもしれません。しかし神の前で本来私にふさわしいはずの人生より神ははるかに良くしてくださったのではないのでしょうか。そこに神の恵みはたくさんあったのではないのでしょうか。私たちはどう表現するのでしょうか。

またヤコブが根本においてしっかり保っていた信仰を私たちも改めて自らのものとして持ちたいと思います。彼の人生には色々なことがありましたが、彼は自分のこの世での歩みを寄留者生活として捉えていました。私たちが目指すべきゴール、私たちの真の故郷は天にあります。そこへと向かう私たちがここで経験する様々なことは一切無駄にならず、神はそれらのことを通して私たちを天の都に住むのにふさわしい者へと整えてくださっています。私たちもヤコブと同じように信仰の目を高く上げて、このゴールに向かって日々歩む者へと導かれたいと思います。またこの恵みの神を知っている者として周りの方々にこの神からの祝福を祈り、「地のすべての部族はあなたによって祝福される」と神が言われた神の民の使命に生きる者とされて行きたいと願います。